

「花かるた」の始原と現在

吉 海 直 人

【要旨】「花かるた」は、ヨーロッパ（ポルトガル）のプレイングカードが海を渡って日本に将来され、その後の鎖国の間に

独自に発展したものである。その特徴は数字を用いず、四季折々の花によって代用している点にある。ただ今日まで、賭博とのかかわりが強調されたために、その文化的特質が見失われていると思われる。本稿は新出資料「武蔵野」の骨刷の紹介を兼ねて、日本が世界に誇りうる「花かるた」の歴史と文化を再検証し、その復権をめざすものである。

一、誤解された花かるた

「花かるた」（いわゆる花札のこと、ここでは花かるたで統一）は日本固有の遊戯かるた（マッチングゲーム）の一種であるが、現在では一般家庭から敬遠されてしまっている。さらにテレビゲーム等の普及によって、その伝統の火が消えようとしている。実は百人一首も同様の運命だったのだが、（社）全日本かるた協会という組織による競技かるたの活動によって、現在では全国的に普及している。学校教育とも強く結びつき、高校の文化活動の一貫として、高文連主催の全国大会等も開催されている。また小学校では枚数を減らした五色百人一首が考案・普及され、今後ますます盛んになっていくであろう。

一方の花かるたは、高倉健や藤純子主演の任侠映画のヒット等によって、やくざや賭博との結びつきが強くイメージされ、そのために百人一首とは正反対に、教育的配慮によって学校や家庭から閉め出されてしまった。そのことは夙に『明治文化史10 趣味娯楽編』（原書房）にも、

花札を悪用する大人たちのとばくがたびたび検挙されると、学校の先生がたも、修学旅行に生徒がトランプの持参をゆるし、ときに先生自身もトランプ遊びに参加しながら、花札は禁止するというようなことが平気で行なわれた。これも西洋崇拝のひとつのあらわれであった。（505頁）

と記されている。こうなると親から子へ、あるいは子供達同士の遊び方の伝授すらままならなくなる。また遊戯人口の減少に伴って、花かるた自体の制作・販売も停滞するという悪循環が生じる（メーカー最大手の任天堂も現在は製造を中止か）。このままでは、花かるたは遠からずして過去の遺物となってしまうであろう。

しかしながら花かるたというものは、決して最初から賭博専用のかるただったわけではない。もちろん賭博かるたの代用としても用いられてはいたが、本当の賭博用かるたは俗に「めく

りかるた」「よみかるた」「株かるた」等と呼ばれるものである。つまり花かるたは、間違ったイメージによって悪い遊びと誤解されているのである。そのことは、花かるたの歴史をたどればはっきりするはずである。^{〔1〕}

二、花かるたの成立

花かるたはかるたの一種であるから、その起源は古く南蛮かるたの日本上陸（室町時代）にまで遡る。「カルタ」とは、ポルトガル語でカードのことであり、花かるたも広義としてはカードゲーム（トランプ）の一種ということになる（その意味では百人一首をかるたと称するのは奇妙である）。

ところで「トランプ」という言葉は、明治期に西洋かるたが輸入された際、かつての南蛮かるたと同一であることに気付かず、トランプという別名称で紹介されたのがその最初だった。実はこのトランプとは、競技における切り札を意味する言葉なのだが、それを誤訳して商品名にしてしまい、なんとその間違いが今日まで継承されているのである。当然、外国へ行ってもトランプと言っても通じない。正式にはプレイングカードでありカードゲームである。

ついでながら、現在のトランプが十三×四＝五十二枚であるのに対して、花札は十二×四＝四十八枚である。この枚数の違いによって、全く別のものと思われているのではないだろうか。しかしながら、トランプは最初から五十二枚だったわけではない。かつて海を渡って日本にやってきたポルトガル・スペイン系の南蛮かるたは、もともと四十八枚だった。それが西洋と日本とで別々な発展を遂げ、明治期に英国から再度トランプとして輸入された時には、五十二枚になっていたという訳である。

そのトランプに刺激されたのか、花かるたの中にも笹札四枚を加えて五十二枚に仕立てているものがある。もっとも現在のトランプは、スピード・クラブ・ハート・ダイヤの四種がそれぞれ一から十三まであって、合計五十二枚である。それに対して花かるたは、四枚一組の札が一月から十二月まであって四十八枚となっている。つまり四種十三枚と十二種四枚であるから、やはり両者は似て非なるものと考えた方がいかもしれない。

百人一首やいろはかるたでも同様のことが言える。百人一首は百×二＝二百枚、いろはかるたは四十八×二＝九十六枚であるから、枚数からしてトランプとは一致しない。また二枚一組である点、四枚一組になっているトランプや花札とは大いに異

なっている。もともと百人一首は、日本古来の貝覆い（二枚一組）の流れを汲むものであるから、仮に南蛮かるたの影響を受けて紙製になったとしても、根本的にはかるたとは別種ではないだろうか。第一、読み手が上句を読んで遊戯者が下句を取るという百人一首は、カードゲーム（マッチングゲーム）の中でも非常に特殊な遊び方だとされている。ましてスピードを競う競技かるたはなおさらである。

いろはかるたはまた事情が異なる。幼い子供に文字を覚えさせるという点では、外国の幼児教育用ABCカードに近いわけで、百人一首の幼児版（初心者用）とも言える。ただしそういった文字カードが単なる単語の羅列であるのに対して、いろはかるたは教訓的な諺が集められているのだから、そこに独自性が認められる（日本のマザーグースとも言える）。あるいは中国の漢詩かるたなどがそのルーツなのかもしれない。

花かるたにしても、貝覆いのな合せ取る要素と、南蛮カルタ的な十二×四の形式が融合して成立したと考えられている。問題は二枚一对だったものが四枚一組に倍増した点である。しかしその明確な成立時期については、残念なことに一等資料が不足しているために、現在も未詳と言わざるをえない。かつては

村井省三氏の説によって、寛政期成立説が通説となっていた。しかし最近江橋崇氏が新資料などから村井説を徹底的に批判され、もう少し遡った成立説を提唱されている。

ところで村井氏は、「花鳥合せ」という花かるたに近似した花鳥を組み合わせた絵合せかるたの一部を所蔵しておられる。

それによって花鳥合せから花かるたへという流れを想定されているわけである。なるほど「目合せ（目覆い）」以来の伝統として、さまざまな「絵合せかるた」が存在しており、そのパリエーションとして「花鳥合せ」が存在していても不思議はない。⁽²⁾

それに対して江橋氏は、その「花鳥合せ」の成立自体が不明であること、また近世後期の豪華な花かるた（滴翠美術館蔵絹地豪華花かるた、三池カルタ資料館蔵絹地花かるたなど）が存在する事実によって、必ずしも「花鳥合せ」から花かるたが成立したのではなく、両者が同時期に並存していた可能性を示唆されている。

もう少し具体的に言うと、村井氏は寛政の改革によってめくりにかるたが禁止されたので、それに代わるものとして文政頃までに花かるたが登場したとされている。つまり寛政から文政二年までの間に成立したと推定されているのである。それに対し

て江橋氏は、花かるたはめくりかるたの代用品として成立したのではなく、それ以前から既に存在していたと主張されているのだ。もちろん花かるたが賭博に用いられたのは事実だろうが、しかしながら花かるたの登場後もめくりかるた取り締まりの記事はずっと存するのだから、代用説は資料的に再考の余地がありそう。また安永二年の記録に「花合せ骨牌」という言葉が出ているので、それを無視あるいは曲解することもできない。

なお大石天狗堂は寛政十二年の創業とされているが、屋号として用いている天狗は「鼻」が「花」に通じるところから、花かるたの隠語となっていると言われている（表向きは米屋）。

もしこの伝承が正しければ、少なくとも寛政頃には既に花かるたが盛んに行われていなければならないことになる。また商売になる程に花かるたの需要があったことも前提条件になる。

残念なことに、古い花かるた（含骨刷り）が全くと云っているほど現存していないし、決定的な資料が乏しいので、その成立を近世中期頃まで遡らせることは危険なのだが、⁽³⁾少なくとも近世後期、安永頃の成立としてもそんなにはずれてはいないようである。⁽⁴⁾ いずれにしても、花かるたに関する資料があまりにも少なすぎるものが、成立を考える上で最大のマイナス要素になっ

ている。

花かるたの資料がこれほど少ないのは、単に潜伏していたためばかりとは思えない。おそらく花かるたはめくりかるた等とは異なり、広く一般庶民の間に流行していなかったのではないだろうか。ただし、歌舞伎の衣裳や浮世絵に花かるたの図案が用いられていたりするので、今後は浮世絵などの絵画資料にも目配りして資料を探す必要がある。興味深いことに、花かるたの遊戲図はほとんど女性しか登場しておらず（図版⑧参照）、そこから賭博代用説は否定されることになる。

三、花かるたの名称の変遷

「花札」という一般的な呼称にしても、最初からそう呼ばれていたのかどうか、必ずしも明白ではない。現在、最古の資料とされている柳沢信鴻の『宴遊日記』安永二年条には、「花合せ骨牌」とある。ここにある「花合せ骨牌」について、村井氏はこれを花かるたとは認めず、「花鳥合せかるた」（点取りゲーム）のこととされているが、「鳥」を無視するのは少々強引ではないだろうか。これが花かるただとすると、最古の呼称は「花合せかるた」だったことになる。また浜松歌国の『撰陽奇

「花かるた」の始原と現在

観』には、「当春花台停止武蔵野ともいふ歌留多也」（文政二年）とあって、ここにも「花合」が停止されているとあるのだから、「花合せ骨牌」も「花合」も、やはり花かるたのことと解釈すべきではないだろうか。それとも花かるただけでなく、「花鳥合」も賭博に用いられて禁止されたと言うのであろうか。幸い『守貞漫稿』（天保頃）に「花合是も小牌に桜梅桐菊杜若等を彩画し勝負をなすの戯れ也或は賭するもあり」とあるから、花かるたの初期の名称は「花合せ」で間違いないと思われる。要するに花かるたは、合わせ取る絵合せの一種だったのである。

また『博戯犀照』（天保頃成立）には、「花かるたといへるものあり」と「花かるた」が紹介されているので、「花かるた」も比較的古い呼称だったことになる。なお、前述の『撰陽奇観』には「武蔵野ともいふ」とあり、「花合せ」のことを「武蔵野」とも称していたことが察せられる。この件に関しては長らく不明だったが、江橋氏によって「武蔵野」の現物（廉価版）が発見・紹介されたことで、花かるたの古型（和歌入り）が武蔵野と称せられていたことが明らかになった。

ところでこの武蔵野を入れる箱の絵表紙右下には、「本家春」という文字が見られる。これは「本家、春」なのか「本、家春」

と読むのかはつきりしない。仮に「家春」だとすると、武蔵野の制作者は「井上家春」、つまり山城屋の可能性が生じてくる。ただし私の所蔵している武蔵野の骨刷（豪華版）には、絵表紙の左下に「菊栄堂」とある（図版①参照）。これこそはかるた屋の屋号だと思われるのだが、資料不足でこれ以上特定することはできない。

いずれにせよ、花札の江戸時代の名称は「花合せかるた」「花合せ」「花かるた」であり、また「武蔵野」であって、「花札」という名称は全く用いられていないことが明らかになった。明治に至っても、依然として「花合せ」という名称が優勢であった。その他、「花牌」「花符」「弄花」とも称した（あるいは「美よしの」も別称の一つかもしれない）。逆に花札という呼称の古い例はなかなか見当たらない。明治二十八年に上方屋が発行した解説書名に『花ふだの憲法』とあって、ようやく花札という名称（この本では「花牌」を「はなふだ」と訓んでいる）が登場する。それ以前の使用例は現在の所報告されていないのである。そのため本稿では花札ではなく花かるたと称しているわけである。

さて松平定信による寛政の改革以降、賭博に対する取り締ま

りは強化されたようだが、それでもかるた賭博は一向に衰退しなかった。そのため花かるたの現物はわずかに数点伝存しているだけで、それがいつどこで製造されたのかを特定することはできない。もちろん古い花かるたのほとんどが、京都で作られたことは間違いない。

花かるたが明治期の文献に浮上してくるのは、必ずしも花かるたが独自に流行したからではなかった。実は明治政府が外国の圧力に屈し、西洋トランプ（プレイングカード）の輸入が解禁されたことがきっかけなのである。外国製のトランプ類が良くて日本製のかかるた類が禁止というのはおかしいということで、必然的に日本のかかるたも全て解禁にせざるをえなくなったわけである。それはちょうど明治十九年のことだった。

そして花かるたを最初に合法的に販売したのは、上方屋前田喜兵衛である。喜兵衛は日本橋に「花合元祖発売根本天狗かるたや上方屋前田商店」を開業して花かるたを売り出し、大成功をおさめた。そのため東京銀座に支店を開業し、また花かるたの最初の解説書である『花かるた使用法』（明治十九年刊）を発行している。

寛政の改革以降、賭博の取り締まりが厳しくなったために、

かるた屋の多くは不況に喘いでいた。もちろん取り締まりが強化されたからといって、賭博が根絶やしになることはなく、水面下では相変わらず盛んに行われていた。それがこれ以降大手を振って販売できるようになったのである。これによってかるた業界はにわかに活気を帯びたことで、花かるたの一大ブームが到来したと言っても過言ではあるまい。そのことは「国民之友」(明治二十四年二月)の時事に、「花歌留多の流行」と題して、

トランプの遊は地方に退去して、東都は花カルタの流行、正に酣なり。花カルタは、曾て上流社会に流行せしが、今や駸々乎として書生仲間に入来れり。花カルタは実に、書生間交際の一要具と成れり。温厚篤実の君子と呼ばれる人にして、尚且つ之を弄するを見る。況や其他の軽薄才子に於てをや。流行の勢、曷為ぞ斯の如く強大なる。東京の書生を、遊民と作し、博徒と作すは。此花カルタなる哉。

と警告されていることによっても察せられる。「曾て上流社会に流行せし」とあることを信じれば、花かるたはかつては上流社会の遊戯だったことになる。この流行によってかるた製造業者が増加し、それぞれに独自の商標で花かるた類を作製したこ

「花かるた」の始原と現在

とで、地方特有の変化に富んだ地方札も数多く成立している(あの任天堂も明治期に開業)。

またそれ以降、国策としての外国移民や中国侵略(戦争)などに伴い、花かるたの外国向け輸出も大幅に増大していった。ただしその売れ行きに目を付けた明治政府(桂太郎)は、アメリカのトランプ税に倣い、明治三十五年四月四日に悪名高い「骨牌税法」を施行している。これは花かるたを含めたかるた一組につき、一律二十銭の税金を課したものである。しかもこの税は販売前に印紙を購入しなければならない。そうなると自動的に定価は倍以上になるから、これによってかるた業界が大打撃を受けたことは間違いない。それでも花かるたは、当時の庶民の娯楽、あるいは戦争に携帯する必需品として売れ続けた(外国向けには税金がかからなかった)。なおこの税法は、大正十五年には五十銭に値上がりし、また昭和三十二年に「トランプ類税法」へと変貌し、平成元年の消費税法施行によってようやく廃止されている。

第二次世界大戦に敗れた後、かるた業界は多少景気が上向いた時期もあった。そのため手作りから大量生産可能な機械製作へと移ったのだが、前述したように学校教育などで花かるたが

排斥されたこともあって需要が減少してしまい、日本骨牌をはじめとする多くのかるた屋が廃業に追い込まれてしまった。もっとも任天堂などは、自社開発のテレビゲームが大当たりをとったために、薄利多売のかるた販売から手を引いたのだが、これなどは例外的なものであらう。

四、花かるた札の月順の変遷について

ところで花かるたは、数字の代わりに一年十二ヶ月に各一種の花が配されている。その意味では花かるたは「花暦」であり、日本独自のものとも言える。四季の変化に富んだ日本だからこそ、最も必要な数字を表示することなく、十二種の植物を月毎に配することができたのである。

現行の花かるたの月順は、

松（一月）・梅（二月）・桜（三月）・藤（四月）・菖蒲（五月）・牡丹（六月）・萩（七月）・薄（八月）・菊（九月）・紅葉（十月）・柳（十一月）・桐（十二月）

となっている。この中では、冬の配列にやや難がある。春の柳（青柳）が何故十一月なのか、同様に夏の桐が何故十二月なのか、牡丹が何故六月なのか、それらを上手く説明することはで

きそうもない。ただ桐に関しては、十二月という季節に相応しいかどうかではなく、一番最後の札ということで、天正かるたのピン（最初、一）からキリ（最後、十二）までのキリと同音であることから、それで十二月になっていると説明されている。しかしことはそう簡単ではない。実は江橋氏によれば、古い花かるたは月順が今とは違っていたらしい。江橋氏は古い花かるたの配列は、

松（一月）・柳（二月）・桜（三月）・藤（四月）・菖蒲（五月）・桐（六月）・萩（七月）・薄（八月）・菊（九月）・紅葉（十月）・牡丹（十一月）・梅（十二月）

だったとされている。両者を比較して、替わっていないのは、

松（一月）・桜（三月）・藤（四月）・菖蒲（五月）・萩（七月）・薄（八月）・菊（九月）・紅葉（十月）

の八種で、替わっているのが、

柳（十一月↓二月）・桐（十二月↓六月）・牡丹（六月↓十一月）・梅（二月↓十二月）

の四種である。もともと柳（青柳）は、前述のように桜とともに春の景物であった。桐にしてもその花は夏に相応しいものである。逆に牡丹の盛りは晩春から初夏だが、江戸時代に品種の

改良が行われ、冬に鑑賞する寒牡丹（冬牡丹）が登場しているので、これなら冬でも問題あるまい（もしそうなら花かるたは寒牡丹の登場以降の成立となる）。十二月の梅にしても、もと梅は春を呼ぶ花であり、少しでも早く咲くことが切望されたのである。しかも梅札に付いている和歌は、降っている雪を花（この場合は白梅）にたとえているものであるから、むしろ十二月の方が相応しい。

こうしてみると、なるほど古い月順の方がむしろ季節に適合しているとも思われる。それにもかかわらず、何故か幕末から明治にかけて、現行のような月順に変更（改悪）されたと考えられているのである（四十枚の虫札では牡丹と萩が除外されている）。あるいは前述のようにめくりかるたの影響を受け、花かるたが賭博かるたの代用品となったため、桐（キリ）が六月から十二月へ無理矢理変更せられたのかもしれない。それに伴って十二月の梅が二月に、二月の柳が十一月に、十一月の牡丹が六月にと、玉突現象的に移動したというわけである。もしそうなら、成立年代を下けている村井氏の賭博代用説が生きてくる。

その影響なのであろうか、幕末から明治前期の花かるたの多

「花かるた」の始原と現在

くには、現行の月順の表示が印刷されているのである。短冊のある札は短冊の中に、短冊のない札は漢数字を丸で囲んで月順が表示されている。それは、古い月順に慣れている人達への配慮と考えられている。それでしばらくして新しい月順が定着してしまうと、もはや月順の表示は不要となってしまうのである。江橋氏はこの現象を逆手にとって、月表示のある花かるたはほぼ明治初期のものとしておられる。つまり月表示が花かるたの製造年代の決め手にもなるわけである（これが何故幕末まで遡らないのか不明）。ただしそれを踏襲しているものもあるので、上限を計る物差しではあっても、下限にまで適用できそうもない（図版②③参照）。

これは私の独断であるが、短冊札に注目してみたところ、現行の順序では牡丹の青短冊が一つだけ赤短冊の中に混じっており、整然としていないことに気付いた。これを古い月順に戻したところ、青短冊は三枚見事に並ぶ。そのかわり、桐と交替したことで赤短冊に切れ目が生じるが、かつて桐札には赤短冊が付いていたということなので、もしそうなら赤短冊の途切れも解消されることになる（ただし桐札の短冊は形がいびつで、逆に無理に付けたという感も否めない）。

月順の変更が、必ずしも慎重な配慮のもとに行われたのではないとすれば、青短冊の配列についても考慮されなかったであろう。そうすると月順改訂の爪痕が、青短冊の配列の乱れに残されたと見ることも、あながち間違いいではなさそうである。ついでながら、短冊の色は何故赤と青（紫）の二色なのだろうか。その二色は、一体どのような意図によって塗り分けられているのだろうか。赤が七枚（桐を加えると八枚）で青が三枚なのは、どうしてなのだろうか。もっとも赤（せき）は「夕」に通じることから、赤短七枚を七夕とも称している。七夕に短冊は付き物である。いずれにせよ花かるたには、解明されるべき多くの問題がまだまだ残っているのである。

もちろん、古い花かるたが全て現行と異なる月順であったことが資料的に証明されない限り、江橋説を定説とすることはできない。江橋氏は貴重な資料を提示されて考察されることが多いのだが、この説に関してはその根拠が提示されていない（残念ながら武蔵野の骨刷りの配列からそれを読みとることはできない）。もともと江橋説以前、松田道弘氏が『トランプものたり』（岩波新書）の中で、愛知県特有の月の並び方を紹介され、「あるいはこの花札の構成が花札初期の配列であったので

はないかという気がしないでもないのです」（57頁）と述べておられる。恐らく江橋氏の発言は、これを踏まえているのではないだろうか。

ここで問題なのは、花かるたの配列が昔はこの愛知方式で全国統一されていたのか、それとも愛知方式は一地方のバリエーションにすぎなかったのかということである。これに関しても資料不足でなんとも言えないが、もし月順の変更がなかったとしたら、問題の月の表示は、花かるた解禁に伴う販路拡大のための戦略として説明できる。つまり花かるたに馴染みのない人に対する配慮であり、数字表記ということでは花かるたのトランプ化（先祖帰り）だったことになる。

百人一首にしても、ごく一部（一時期）に歌番号を明記したものがあがるが、だからといって百人一首の順番が変更されたことはない（百人秀歌型配列の百人一首があがるが、それがかかるたになった事実は聞かない）。唯一、むべ山かるたの番号が百人一首の歌番号と異なっているものの、これはやはり例外であろう（大石天狗堂の百人一首には現在も番号がはいっている）。

五、花かるたの図柄について（前半）

続いて花かるたの図柄を順に分析してみたい。特に新旧の相違についても触れたいので、武蔵野の骨刷り（図版①）を基本として見ていきたい。

まず松札であるが、鶴は右上の日輪を振り返って、しかも一本足で立っている。俗に「松に鶴」と称されているが、これは長寿を祝う伝統的な松鶴図という図柄であり、現行のものとはとんと変わらない。ただ松の描き方と、鶴のポーズに多少の違いが認められる（一本足か二本足か、丹頂か否かなど）。日輪は元旦の初日の出であろう。これによって「日の出に松」とも称されており、四光の一枚にもなっている。なお二番札には赤い短冊があるが、骨刷りには文字がない。現行の短冊には「あかよろし」と書かれている。これは「赤宜し」なのだろう。ただし青い短冊には「青宜し」などの文字は一切認められない。

梅の一番札は、梅の枝に鶯が止まり、口を開いて囀っている構図である。一般に「梅に鶯」と言われているが、これなど取り合わせの代表であるから変わりようがなかったのか、最も図柄に変化が少ないものの一つである。なおこの鶯に時鳥と燕が

揃うと「小鳥」という役になる。これは文字通り小さな鳥だが、その反対の「大鳥」（鶴・雁・鳳凰）という役もある。

同様に、桜札もあまりバリエーションは見られない。一番札は花見用の幔幕が張られており、そのために「桜に幕」あるいは「御所桜」「御殿桜」と称されている。この幕には装飾が施されているため、銀桜として四光の一枚にもなっているのだが、あるいは百人一首三番紀友則の「ひさかたの光のどけき春の日に静心なく花の散るらん」歌が想定されているのかもしれない。骨刷りには桜の赤短冊に文字は刷られていないが、現行のものには「みよしの」と記されている。これはもちろん桜の名所である吉野のことである（「み」は「美」で吉野の美称）。ただしこの桜は、年代的にも染井吉野ではなく山桜であろう。

なお松・梅・桜の一番札が三枚揃うと、「菅原」という役になる。この菅原には、菅原道真の伝説を踏まえた浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』（延享三年初演）が下敷きになっている。そこに登場する三つ子の名前が梅王丸・松王丸・桜丸であることから、梅・松・桜の組合せを「菅原」と称しているのである。当時における浄瑠璃や歌舞伎は、人々にとっては一般常識に近いものだった。また松・梅・桜の短冊が揃うと「うらす」という役に

なるが、これは一番札の「表菅原」に対して「裏菅原」という意味である。中には短冊に「うらす」と書かれたものもある。またこの短冊三枚にだけ文字が書かれていることから、書道の神様である菅原道真にあやかたという別伝もある。

藤札には新旧の相違がある。一番札の鳥は時鳥だが、現行のものにはその背後に赤い三日月が描かれている。ところが武蔵野には月がない。どうやら月のないのが古型のようである。その後、丸い月なども登場しているが、最終的に三日月で落ちついたようである。あるいは時鳥の鳴く時間帯が、昼から夜に移行したのかもしれない。それについて一説では、百人一首八一番後徳大寺左大臣の「時鳥鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる」歌の構図になっていると言われている。藤とは無縁であるが、有明の月だから三日月が描かれたのであろう（ただし二十三日以降の月であれば半月の可能性もある）。

菖蒲（あやめあるいはかきつばた）札にはいくつかの問題がある。まず一番札には板橋（八橋）が描かれており、そのために「菖蒲に八橋」と称されている。その橋には杭が三本（稀に二本）打ってあるが、松井天狗堂ではこの杭の頭をかつて螢と称していたことである。実は、明治二十一年刊の『骨牌勝

利法』には「菖蒲に螢」という表現が出ている。しかしながら、つい最近まではその根拠が見当たらなかったもので、村井氏などは螢を杭の隠語と推測されていた。その後、江橋氏によって螢の飛ぶ古い札が発見・紹介されたことで、全てが氷解した（論より証拠！）。現行のものにはこの螢が描かれていないが、唯一松井天狗堂の花札には螢が二匹描かれている。⁸村井氏も江橋氏も、何故松井天狗堂の螢に気付かなかったのか不思議でならない。もし江橋氏がこれに気付いておられれば、「ごく短期間、場合によってはただ一つの製造元が実験的に試みただけなのであろうか。不思議である」とは書かなかったはずだからである。

次に八橋に関連することであるが、これを八橋と称するのは、かす札に在原業平の「唐衣」歌が記されており、それが『伊勢物語』九段の歌であることによる。『伊勢物語』九段は有名な東下り章段の一つであり、「三河の国八橋」で詠まれた歌なので「八橋」なのである。これは光琳や抱一などの作品によって夙に類型化されている。ただし業平の歌は明らかに「かきつばた」を詠じたものだから、もしこの歌を重視するのであれば、あやめ札ではなくかきつばた札とすべきであろう。¹⁰もともとあやめとしようぶとかきつばたの区別はややこしいのだが、花か

るたはどれが正式名称なのだろうか（中には「葱（ねぎ）」と称するものもある⁽¹¹⁾）。

牡丹札には大きな相違は認められない。かつて新花札というものがあるが創作された際、蝶に変わって唐獅子と組合されたことがあるそうだが、まだ現物を見たことはない。牡丹と唐獅子も組合せとしては適切ではある（高倉健の主演映画でも有名！）。

さて肝心の牡丹に蝶だが、これは中国の『莊子』に、莊周が夢で胡蝶となって牡丹に戯れたという故事があり、おそらくそこから生まれた中国的な構図と見て間違いないまい。

なお牡丹札の蝶が下向きになっていることから、多くの人は札を逆さまにして、上向きの蝶が正しいと考えているのではないだろうか。しかしながら札をよく見ると、蝶のいる方の角に赤い雲が描かれていることに気づくはずである。これは雲だから、上になくてはおかしい。つまり、赤い雲は上下の目印になっているのである。これなど花かるたの知識度を試すのに最適なメルクマールではないだろうか。

六、花かるたの図柄について（後半）

続いて萩札だが、これにも大きな相違はない。強いて言えば、

「花かるた」の始原と現在

猪が前半身（うずくまっている）か全身（立ち上がっている）かの違いは認められる。「臥す猪の床」（猪が萩などを敷いて寝ること）という歌語があるのだから、臥している方が古型ではないだろうか。また特殊な新花札では、猪に換えて猫が描かれていたらしいが、まだその実物は見たことがない。この猪と鹿・雁が揃うと「あらし」という役になる。これは「嵐」ではなく「荒らし」で、田や畑を荒らす動物という意味であろう。

薄札には重大な相違がある。古い一番札は、薄と満月になっており、山は描かれていない。所載和歌は「武蔵野」「草の原」だから、山では困るのである。和歌にも「武蔵野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ」（近世期作者未詳歌）と詠まれており、それが武蔵野のイメージとして定着している。しかしながら後のものになると、薄の背景に既に山の輪郭が描かれている。それが現行のものでは、薄が完全に黒く塗りつぶされ、山と一体化してしまっている。そのためにいつしか山札という別称も生じている。しかし花かるた（植物）なのだから、肝心の薄が消えて山と月だけになったら、もはや花かるたとは言えないのではないだろうか。二番札には、飛んでいる雁が三羽描かれている。三羽というのが雁行の定数のよ

うだが、中には二羽の構図もあったらしい。前述のように雁と鶴・鳳凰が揃うと「大鳥」という役になる。これは文字通り大きな鳥という意味である。

この薄札は坊主とも呼ばれているが、何故坊主なのだろうか。丸い山があるからだろうか。それとも満月だからだろうか。面白いことに、例の新花札には月見をする坊主が描かれていたそうである。これに関して江橋氏は、「このカルタの考案者が企図した図柄の革新は失敗した⁽¹³⁾」と断じておられる。しかし新花札以外にも坊主の図柄は存していた。例えば明治期の金銀装花札（山與製）にも旅姿の僧が描かれている。これは学研の百人一首にカラーで掲載されているが、江橋氏はこれを見落とされているのだろうか。ついではながら、私はこの僧は西行ではないかと考えている。つまり月見西行の図柄というわけである。そして百人一首八六番西行の「嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな」歌にも通じる。なお未確認であるが、満月の中に兔が描かれているものもあったとのことである。

ところで花かるたには赤・青の短冊札が十枚ある。短冊がないのは薄と桐の二つであるが、それはどうしてなのだろうか。もっとも桐については、古い札には赤短冊があったことが確認

されている。そうすると、薄だけが最初から短冊を持たなかったことになる。

菊札には大きな相違は認められない。杯は重陽の節句（九月九日）の菊酒を表しているのであろう。現行のものは、その杯の中に「寿」という字が記されている。これは長寿の祝いを意味している。この杯部分は「寿」以外にも、「喜」文字やかると屋の屋号が入ったりしているようだ。なお、他の札には生き物が描かれているが、桜と菊だけは生き物札がない（菖蒲は蟹）。これもうまい取り合わせが見つからなかったのだろうか。

紅葉札にも大きな相違はない。一番札は鹿が振り返った図柄になっているが、それは音のする方を向く鹿の習性を表したものである（まれに前向きの鹿図もある）。この図柄は、百人一首五番猿丸大夫の「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」歌を絵にした光琳かるた（宝永頃成立）に類似している。で、猿丸歌を絵画化したもの（歌意図）と考えてよからう。なおこの鹿が横を向いていることから、知らん顔をする・無視することを、博打用語（隠語）では「しかとずる」あるいは「しかとう（鹿頭？）」と言う。ついではながら例の新花札では、短冊札に公家が描かれているが、それこそは猿丸ではない

だろうか。

柳札には大きな変動が生じている。季節については、本来春だったものが冬に移動したわけだが、それとは別に古い一番札は、夏の夕立の図柄になっていた。武蔵野では横殴りの雨に雷文が付いており、そこに閉じた傘に顔を隠して道を急ぐ男が描かれている。この構図を浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』（寛延元年初演）の五段目に登場する悪役の斧定九郎（初代中村仲蔵の当たり役）と見る説もある。それはともかく、明治二十三年刊『四季花づくし』（荒川版）も同様の図柄である。ところが同じ年に発行された『花かるた独稽古』では、既に小野道風になっているので、この明治二十三年こそは過渡期と考えられる。その過渡期には相撲取り風の絵、やくざ風の絵、あるいは人間に化けた狸の絵（図版⑤参照）もあったが、早々と柳に飛びつく蛙を見る小野道風（場所は東寺の池）が定番になったらしい。もっとも、同じく道風といっても、その図柄は多様である。傘が開いているか閉じているか、刀を差しているか否かのみならず、蛙なしの絵もあった。いずれにしても、現行の花かるたで人間が描かれているのはこの札一枚だけである。これはあるいは十一月歌舞伎の顔見せにも通じているのかもしれない。

「花かるた」の始原と現在

この道風の故事は、書道の上達で伸び悩んでいた道風が、柳の枝に繰り返し飛びつく蛙を見て努力の大切さを悟り、自らも稽古に励んで後に大成したという教訓的なものだが、古い文献には見出せない。どうやら寛延三年以降成立の『梅園叢書』の記述が初出のようである。知名度としては、その少し後の浄瑠璃『小野道風青柳硯』（宝暦四年初演）が相応しいだろう。しかもこの版本には、既に花かるたと同じ構図の挿絵が出ています。さらに宝暦五年には歌舞伎としても上演されており、「蛙飛び」の場として人気を博した（浮世絵や引札にもある）。この道風が前述の斧定九郎と入れ替わる（斧から小野へ）のだから、ちょっとできすぎているような気もする。¹⁵⁾

かつて一番札に雷（稲妻）が描かれていたことで、この柳も四光の一枚に数えられている。¹⁶⁾ その雷が消えた替わりに、かす札に雷神図や落とした太鼓を釣り上げる図柄が現れた（大津絵にも同構図がある）。そのためにこれが鬼札（雨の鬼）とされている。しかしながら現行のかす札は、柳を黒・背景を赤で塗りつぶしており、せっかくの太鼓釣りの図柄は見えなくなってしまう（ただし、松井天狗堂の花かるた（図版⑥）では現在もそれを見ることが出来る）。一番札に描かれている鳥は、

尾が二股に分かれているので燕（濡れ燕）なのだが、その尾がやや長いことから尾長とも称されている。普通は一羽だが、二羽のものもある。なお燕は渡り鳥なので、冬に日本にいるはずはない（「幸福の王子」が参考になる）。この柳札には四枚全てに雨が描かれているので、古くから雨札という別称も生じている。例えば歌舞伎『露小袖昔八丈』（明治六年初演）にも、「よく花合の言草にも雨は坊主を消すといふから」と出ている。

最後の桐札の図柄はほとんど変化していないようだ。「桐に鳳凰」は、紋所の一つともなっているポピュラーな取り合わせである。なお、鳳凰というのは鳳が雄で凰が雌だから、「桐に鳳」でも構わない。また鳳凰は帝王の喩でもあるから、天正かるたのキリ（十二、キング）とも通じる。この札は銀桐として四光の一枚になっているが、日月は描かれていない。これは星形の桐の花が星に見立てられているらしく、「桐に星」という別称も生じている（「桐に鳳（ほう）」からの転訛かもしれない）。また松（日）・薄（月）・桐（星）で三光とすることもある。

これに銀桜と雷（柳）が揃えば五光となる。なお二番札は黄色く塗られているが、桐のマークが小判に刻印されていたことから、小判の隠語ともなっているので、そのために黄色なのかも

されない。ただし、かつては赤い短冊があったようなのだが、何故か明治以降のものには見当たらない。現在では、かろうじて地方札の越後小花や山形花にその痕跡が残っているくらいである。

七、花かるた所載の和歌について

武蔵野型と呼ばれる古い型の花札には、十二種中のちょうど半分、つまり六種のかす札（三・四番札）に、和歌が上句・下句に分けて記されている。もしこれが花かるたの原初形態であるとすれば、間違いなく歌かるたの伝統を踏襲していることになる（『撰陽奇観』にも「武蔵野ともいふ歌留多也」とあった）。ではまずその和歌を、武蔵野の骨刷り（図版①）から抜き出してみたい（括弧内は出典）。

・松（正月）

ときはなる松のみどりも春くれば 今一しほの色まさりけり
（古今集二四番 源宗子）

・梅（二月）

鶯の鳴音はしるき梅の花 いろまがへとや雪のふるらん
（続後撰集一四番 紀實之）

・藤（四月）

わが宿の池の藤浪さきにけり 山ほとゝぎす今や来なかん

（古今集一三五番 読み人知らず（一説、柿本人麿作））

・菖蒲（五月）

唐衣きつゝなれにしつましあれば はるゝ来ぬる旅をし

ぞおもふ

（古今集四一〇番 在原業平 伊勢物語九段）

・薄（八月）

行末は空もひとつにむさし野、 草の原よりいづる月影

（新古今集四二三番 藤原良経）

・紅葉（十月）

下もみぢかつちる山のそゝしぐれ あれてやひとり鹿の鳴

らん

（新古今集四三七番 藤原家隆）

以上の六首であるが、試みに季節の割合を調べてみると、春二首・夏二首・秋一首・冬一首となっていた。春・秋各二首、夏・冬各一首というのが和歌の伝統的な比率であるから、花かるたでは春秋と夏冬の差ではなく、一年の前半に比重を置いていることになる。この和歌の出典を見ると、『古今集』三首・『新古今集』二首・『続後撰集』一首となっている。そのうちの『古今集』・『新古今集』に所収されている五首は、比較的

「花かるた」の始原と現在

有名な歌ばかりである。しかし『続後撰集』の一首は、あまり知られていない歌である。もっともその作者は大歌人紀貫之なので、決してひどい歌が選ばれたわけではなかった。ただ面白いことに、この歌にだけ大きな異同がある。まず原初的な『紀貫之集』では、上句が「鶯は鳴き初めぬるを梅の花」となっている。それが『続後撰集』では、「鶯の鳴くはしるきに梅の花」と改変されている。武蔵野ではそれが「鶯の鳴く音はしるき」と、さらに微妙に変化している。

ついでながら下句に「いろまがへとや雪の降るらん」とあるのだから、雪に紛う色といえはこの梅は白梅でなければなるまい。梅札はかつて十二月（冬）にあったとされているので、実際の梅の花ではなく雪を花に見立てる歌であり、それでこそ季節的にも相応しいと思われる。それが二月に移動したことから雪との関連が薄れ、いつしか白梅から紅梅へと色が変わったのかもしれない。歌が削られた現行のものは、ほぼ紅梅に統一されている。

それ以外の本文異同としては、藤札の五句目は本来「いつか来鳴かむ」なのだが、それでは肝心のほととぎすが不在になると考えてか、「今や来鳴かん」となっている。紅葉札の三句目

が「夕しぐれ」とは読めず、どう見ても「そゝしぐれ」に見える。また四句目が「ぬれてや」ではなく、「あれてや」としか読めない。これは恐らく版木に彫る際に、変体仮名を読み誤ったために生じたのであろう。なお、武蔵野では問題ないが、他の和歌入り花かるたの多くは薄札の「空」「草」の字が「雲」「景」と誤っている。教養の低下が和歌を削除させたのかもしれない。

八、まとめ

本来ならば、この後に花かるたの八八をはじめとする競技法の解説が続かなければならないのだが、私自身、子供の頃に少し遊んだだけなので、競技法を解説できるような知識は持ち合わせていない。というよりも、花かるたは時代により地域により、様々な競技法（ローカルルール）が存するので、思った以上に奥深いものであることがわかった。花かるたの総合的な研究を進めるためには、もっと基礎資料を揃えなければなるまい（製造法も説明すべきであろう）。探せば花かるたの現物や競技法に関する資料はまだまだ発掘できるはずである。今後しばらくは関係資料の博搜が最大の課題であろう。

最後になったが、日本固有に発展したこの花かるたは、世界中のどのトランプよりも美しい図柄を有している。またトランプに必須の数字を四季の植物で表出していることも傑出している。つまり日本が世界に誇ることのできる美術的価値の高い文化遺産なのである（外国の博物館にはよく展示されている）。まして和歌を含む「武蔵野」は、明らかに歌合の伝統を継承した「四季花合せ」だったのであり、また貝覆いの伝統をも継承していたことになる。その花かるたが現在では不当な扱いを受け、絶滅の危機に瀕していることを申し添えて、私の花かるた論を終わらせていただくことにする。

「注」

- (1) 本稿をまとめるにあたって、江橋崇氏の「花札の歴史（一）」
- (2) 日本遊技史 7-9・平成7年11月-9年10月を参考にさせていただいた。江橋氏の学恩に心から感謝申し上げるとともに、本稿においてその江橋説を部分的に批判していることに對しての非礼もお詫びしたい。
- (3) 享保六年刊の浮世草子『教訓世誦鑑』には、「我國のならはし、歌留多と云へる数四十八枚ある物を以て、勝負の品を分つに、

半の数に三・五・七・九と当るを勝とし、二・四・六・八を皆負とす。是は歌留多三枚を以て、其の長と半との印を見る。ここに於いて、かう・おいてうなど云へる色々の名あり。さて又九枚六枚の数を以て一・二・三・四乃至九・十・馬・きりと読んで勝負をなすを、これをば読と云ふ。二と二とを合せ五と五とを合せ、次第次第に其の数を合せて、勝負をなすをば合せ歌留多と云ふ。さまざまの品ありと云へども、委く記すに及ばず」という記事が見られる。ここに「合せ歌留多」と出ていることが注目される。それ以外に近世中期頃の「花合せかるた」もいくつか存している。

- (3) 江橋氏前掲論文、注(1)では新潟県長岡市で発行された「温古の葉14篇」(明治24年)所収の「骨牌類」に、「花かるた」と云は、享保年中柳沢家盛んなる頃、將軍家坊主衆の發明製造せしものにて云々とあることを紹介され、享保頃成立の可能性を示唆しておられる(437頁)。しかしながら記事の信憑性にはやや問題が存するように思われる。注(6)参照。

- (4) 浄瑠璃『伽羅先代萩』(天明五年刊)に、「おいてう・かぶ・たん・ぶた・うんすん」(大系本『浄瑠璃集下』338頁)と出ている。これはかるた用語の羅列だが、その中の「たん」について、大系本の頭注では「花札の赤短・青短の略」と注している(角川古語大辞典も同様)。もしこれが花かるたの短冊のことであれば、花かるたの成立は天明五年まで遡ることになる。

「花かるた」の始原と現在

- (5) 山口格太郎氏「日本のかるた」『日本のかるた』(カララブックス)昭和48年12月、村井省三氏「明治の花札」別冊太陽9(いろはかるた)・昭和49年11月などの説である。この考え方は、花かるたが賭博用に用いられていることを前提にしたものであろう。

- (6) 江橋氏が紹介された注(3)の「温古の葉14篇」では、月順が現行通りに説明されている。それに関して江橋氏は一切コメントされていないが、もしこれを尊重するのであれば、月順の転換についての合理的な説明が必要になるはずである。あるいは月順は混沌としていたのであろうか。

- (7) 花かるたの図柄に関しては、大川五兵衛氏「花札の図柄の古典的背景」聖徳大学短大部文学研究16・平成13年2月があるが、残念なことにはば動物と植物の取り合わせの説明に留まっている。

- (8) 山口泰彦氏「最後の読みカルタ」(私家版)平成10年10月にも、「松井さんの『手刷り花札』では葉に2匹大きく螢が描かれている」(115頁)と図入りで明記してある。

- (9) 江橋氏前掲論文、注(1)の256頁を参照していただきたい。

- (10) 山口氏前掲書、注(8)の244頁に参考になる記事が出ている。

- (11) Palmer, HANA-AWASE, THE ASIATIC SOCIETY OF JAPAN, 1891によれば、五月はあやめ(かきつばた、ねぎ)、八月は薄(坊主、野)、十一月は柳(雨、時雨)と称されていたことがわかる。

「花かるた」の始原と現在

(12) あるいは慈円の「夏の野の萩の初花折り敷かん臥す猪の床に

枕並べて」(拾玉集) 歌などを下敷きしているのかも知れない。

また浄瑠璃『娥(かほよ) 歌かるた』(正徳四年初演) にも、「泣いて臥す猪のかるもの床涙にくつる計也」とある。

(13) 江橋氏前掲論文、注(1)の255頁を参照していただきたい。

(14) 『梅園叢書』(安政二年刊)の「学に志し芸に志す者の訓」に、

「小野道風は、本朝名譽の能書なり。わかつりしとき手をまなべども、進ざることといとひ、後園に躊躇けるに、墓の泉水のほとりの枝垂たる柳にとびあがんとしけれどもとゞかざりけるが、次第々々に高く飛で、後には終に柳の枝にうつりけり。道風是より芸のつとむるにある事をしり、学んでやまず、其名今に高くなりぬ」(22頁)と出ている。これは三浦梅園の創作の可能性もあるが、その頃流布していた話を書き留めただけだとすると、道風の説話の成立はもう少し前に遡ることになる。

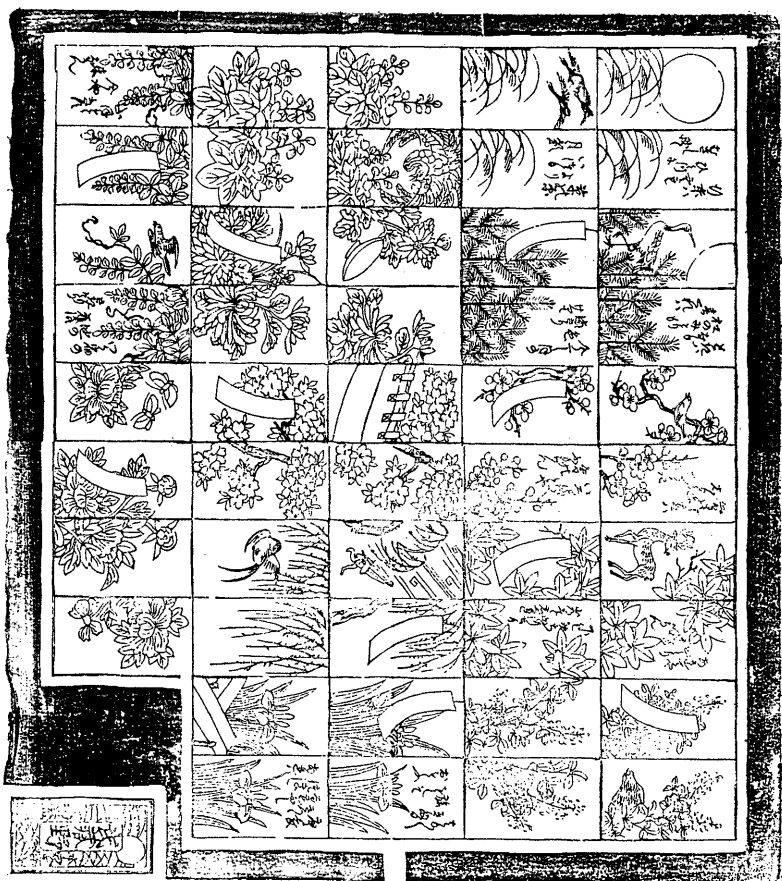
(15) 川柳に「鶯も蛙も鳴かぬ小倉山」という句がある。これは

『百人一首』に「鶯・蛙」が詠み込まれていないことを指摘したものであるが、その裏で「鶯も蛙も鳴く」花かるたが意識されているとも考えられる。ただしもしそうなら、小野道風と蛙の図柄は明治以前に既に定着していたことになる。

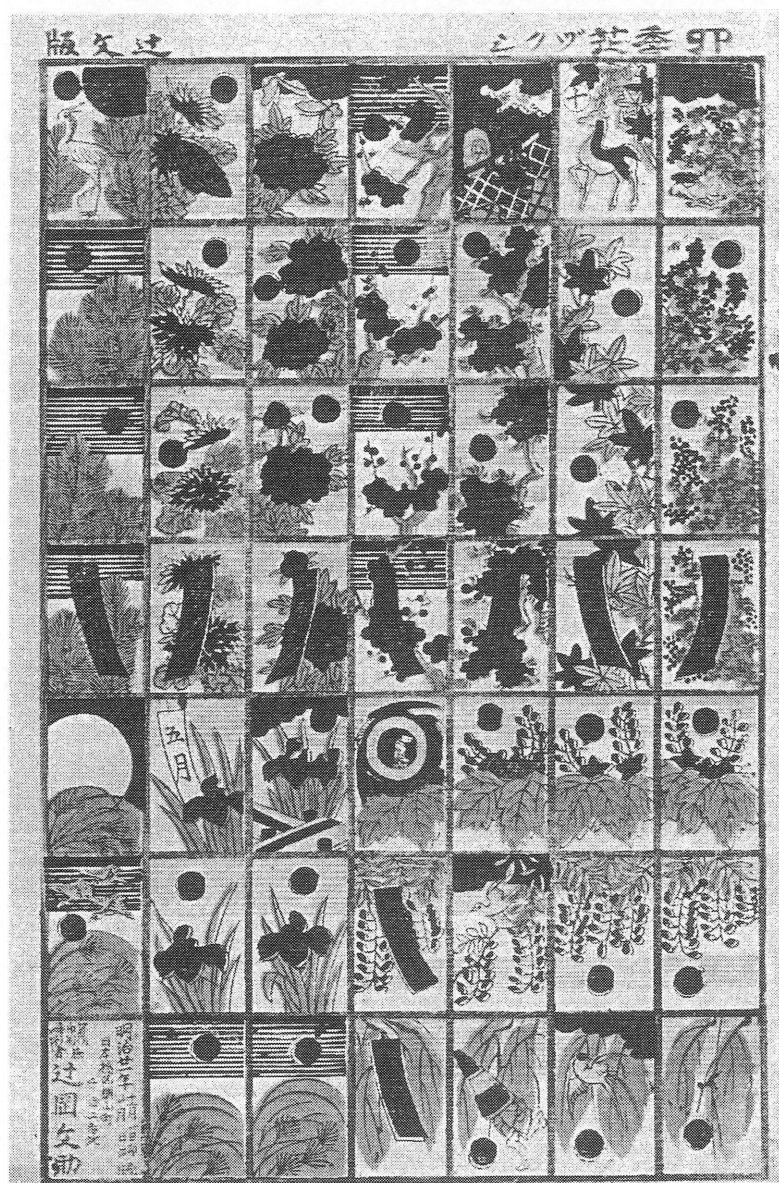
(16) 現在の韓国製の花札(花闘)を見ると、柳の上札には「光」という文字が記されている。これはかつての役札の名残であ

ろう。

(17) 花かるた関係の本に關しては、既に百五十冊以上収集している。しかしながら花かるたの商標名及び業者に關する総合研究は未だ十分には行われておらず、今後の課題としたい。

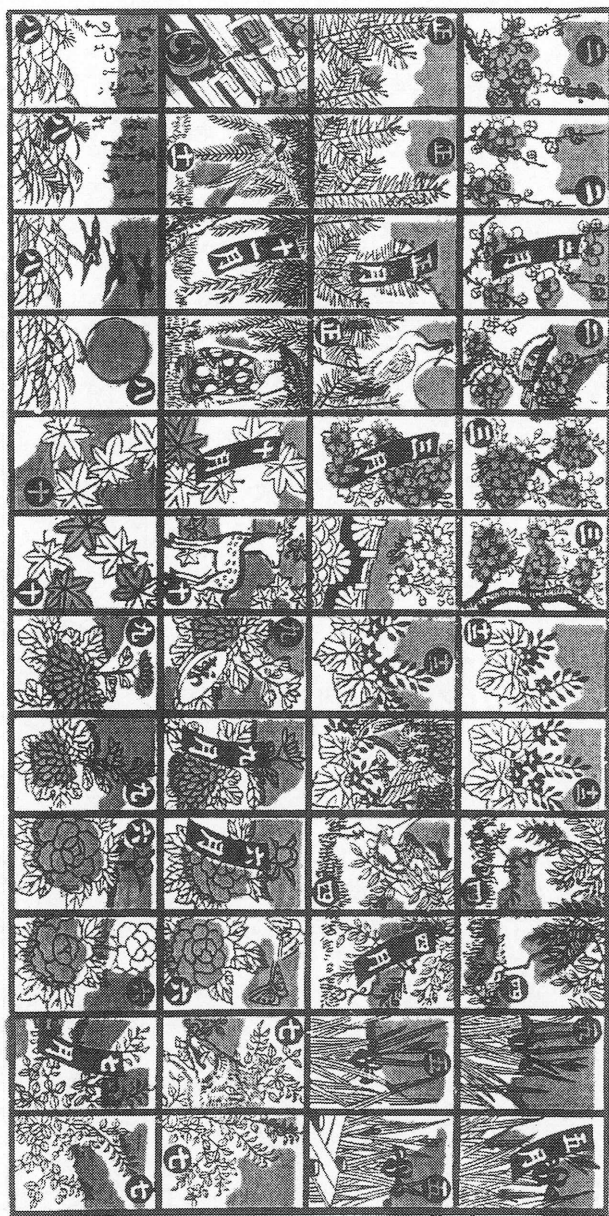


〔図版① 江戸末期武蔵野骨刷り〕

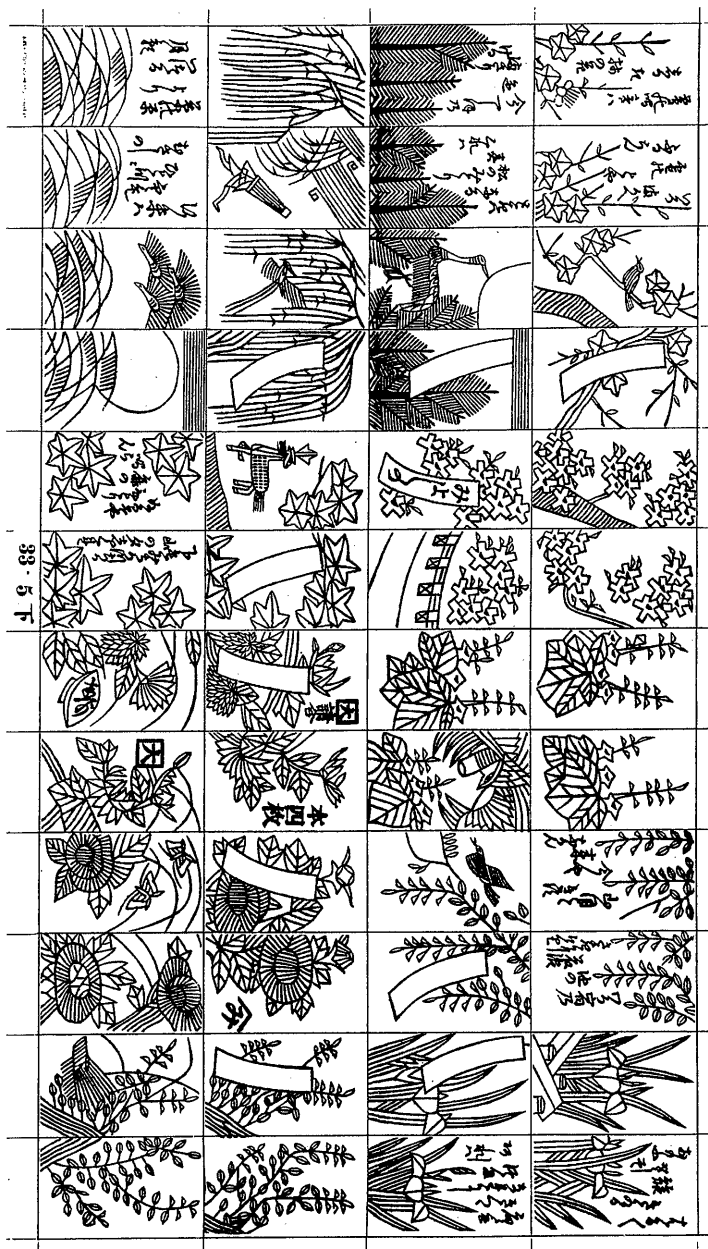


「花かるた」の始原と現在

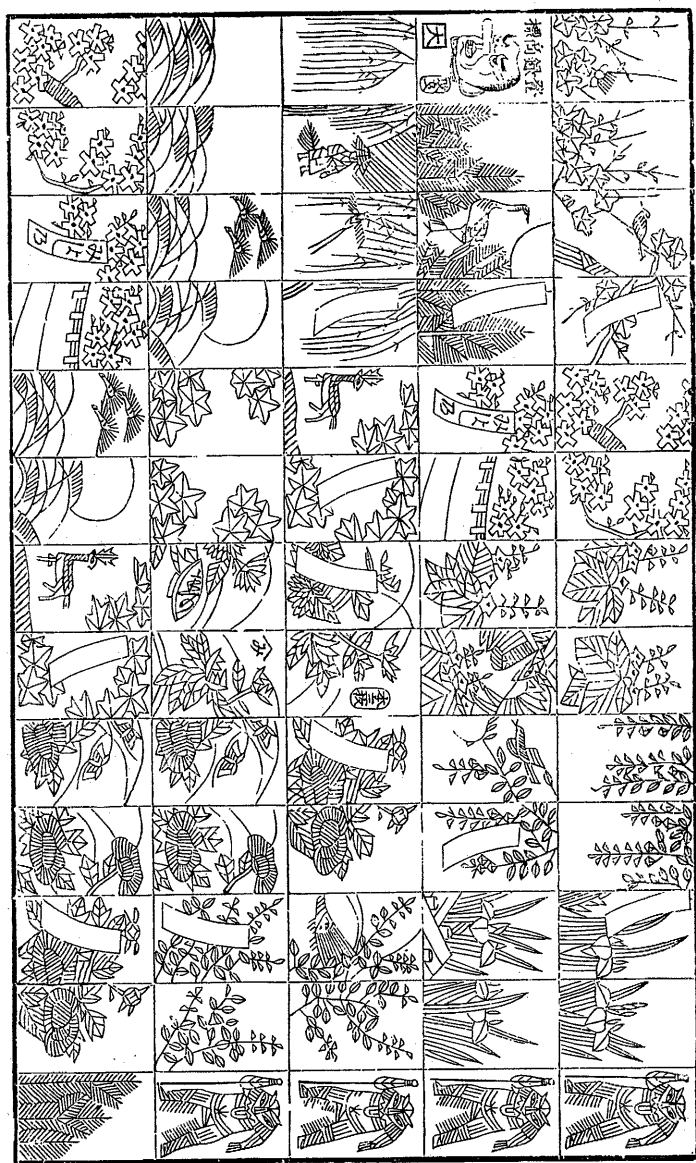
〔図版② 明治二十一年四季花づくし〕



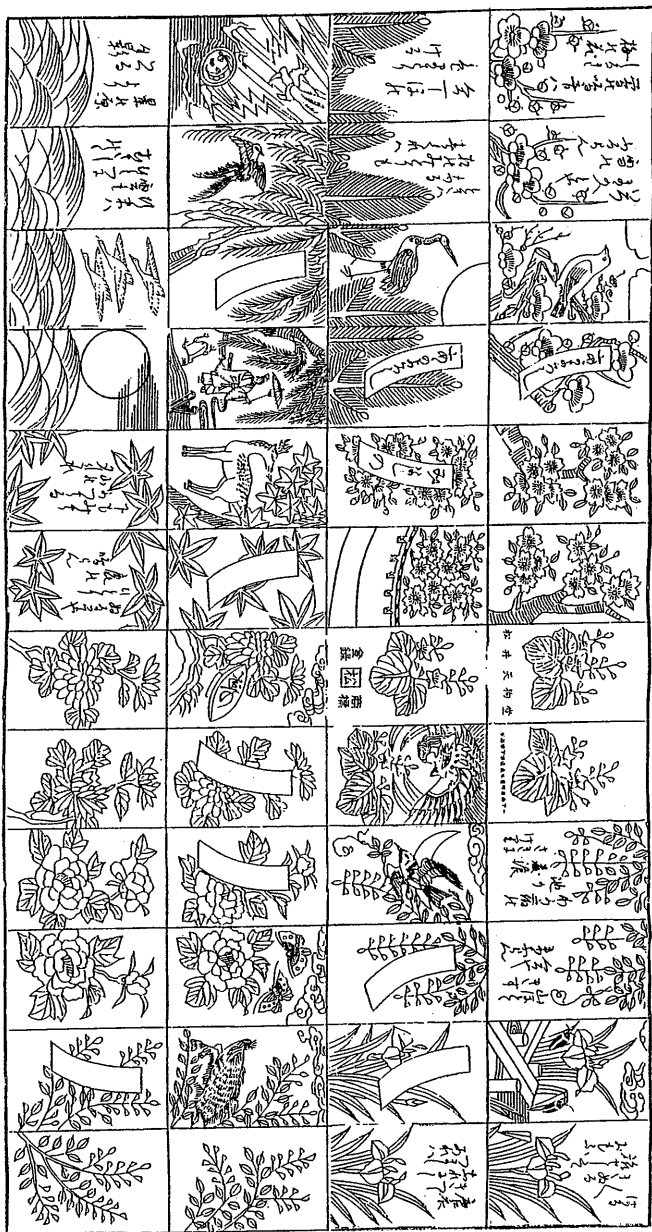
〔図版③ 明治三十一年月入り花かるた〕



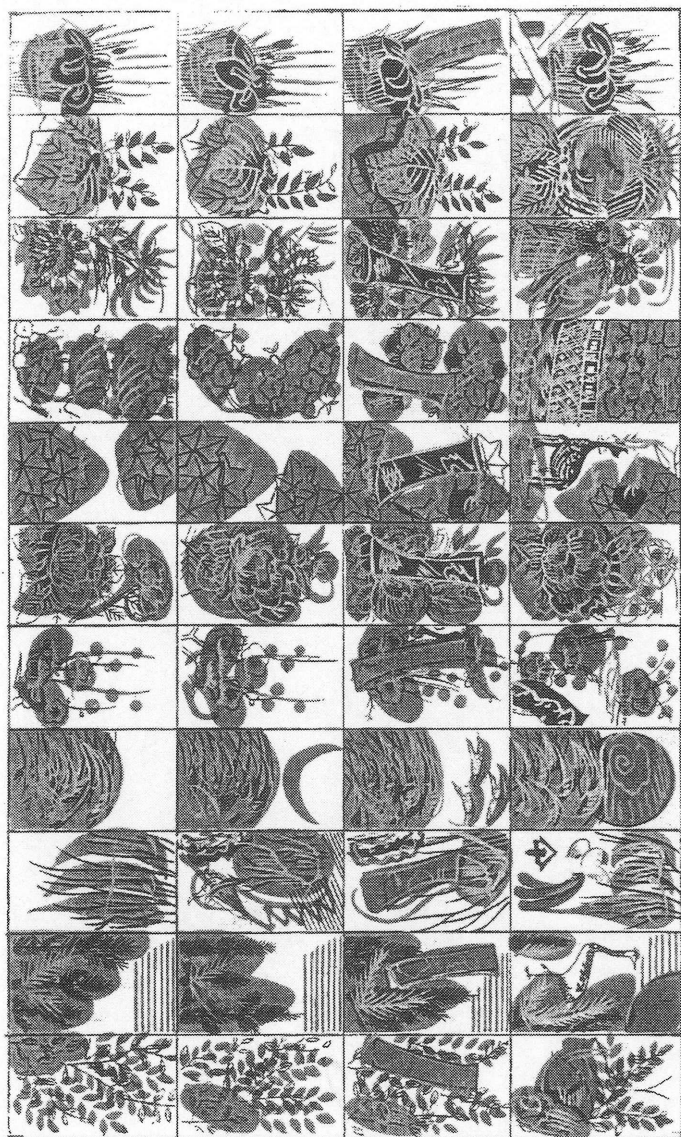
〔図版④ 大石天狗堂越後花骨刷り〕



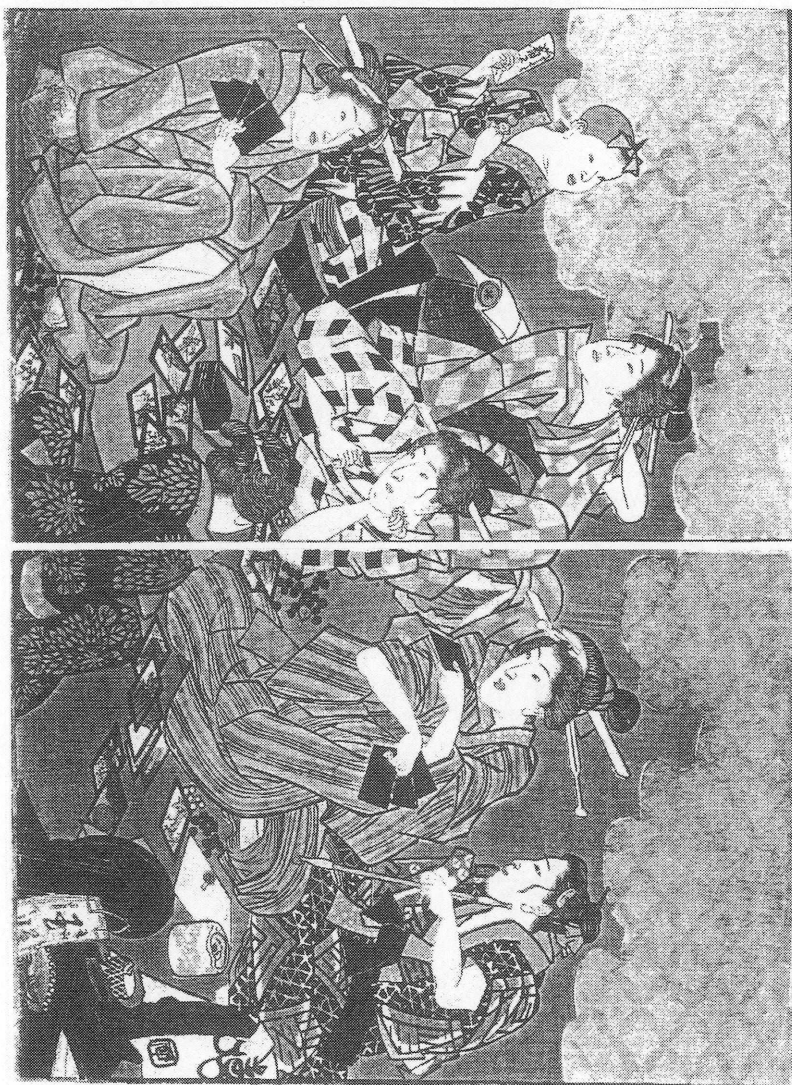
〔図版⑤ 大石天狗堂鬼札付き骨刷り〕



〔図版⑥ 松井天狗堂螢入り骨刷り〕



〔図版⑦ 鶴田花巻花（藤れなし）〕



〔図版⑧ 花かるた遊びの図〕